

解答

〔一〕問一 ① 八〔月〕三十一〔日〕 ② 四〔年生〕 ③ 四階建て以上のアパート

〔二〕問一 ア 1 イ 3

このまま夏休みがずっと続くことを願う気持

成長した未来の自分

問一	4	1	2	3	4	5	6
問二	4	1	2	3	4	5	6
問三	4	1	2	3	4	5	6
問四	4	1	2	3	4	5	6
問五	4	1	2	3	4	5	6
問六	4	1	2	3	4	5	6
問七	3	1	2	3	4	5	6
問八	3	1	2	3	4	5	6
問九	3	1	2	3	4	5	6
問十	4	1	2	3	4	5	6
問十一	4	1	2	3	4	5	6
問十二	2	1	2	3	4	5	6
問十三	4	1	2	3	4	5	6

〔二〕問一 ① 欲望の力で豊かになつたが、人々は幸せではない。

② モノはたくさんないが、人々は幸せに生きている。

問二 A 人を前進させる大きな力になる点。 B 人を呪縛し、狂わせてしまう点。

問三 欲を捨てると不満がなくなると気づいたこと。

問四 最初 「足りない」 最後 れてくる。

問五 目標をおさえながら進めば、いずれ大きな目標にたどりつける点。

問六 人見知りの強い私だが、どうしても友だちになりたい人がいたので、意を決して話しかけた。幸い仲良くなれたが、今度はその人に他の人と話してほしくないと思うようになり、そういう私の思いを負担に感じた友だちは、私と距離を置き始めた。私と友だちをつなげてくれた「欲」が今は二人の仲をさこうとしている。「欲」に操られたくないと思うのも「欲」だと思うとますます混乱してしまった。

〔三〕 A 2 B 3	〔四〕 1 A 講岸 2 厚〔い〕 3 減〔らす〕 4 治〔びせる〕	〔五〕 6 祭典 7 おんぎ 8 とうじ 9 まい〔る〕
-------------	------------------------------------	------------------------------

解説

〔一〕出典は、小池昌代「九月の足音」。

〔二〕「秋が来る」という一文から文章は始まります。このような「いつ」を表すことばや「どこで」「だれが」「どうした」を表すことばに注意をしながら読み進めていくことで、場面の状況をつかみましょう。流星は「やるべき宿題は終わつ」た「最後の一日」、すなわち「夏休みはもう終わり」を迎え、「明日から学校に行かなければならない」状況にあります。「明日からまた、学校であるうしやべつはいけない」や「泳ぎたって、四年生ともなれば二十九メートルは泳げなければならなかつた」「九月一日がうふみこんでくる」といった部分からは流星が学校に行きたがつていないうがえます。この他、「夕方になつてアパートにもどつたとき」「ひとりでエレベーターに乗つて、四階まであがつていく」などから流星の住んでいる家がわかりります。

〔三〕問一で夏休みの終わりを迎えた流星が学校に行くのを嫌がつていてこれを確認しました。「明日からまた、学校である」が、「自分もまた、この標本の虫であつたら二度と、学校に行かないですむ」と考へている流星は、「菓子箱（標本箱）のなかの乾燥した蟬たちのように」、自分もこのまま「永遠の夏に、ピンでとめられ」、ずっとどこどまつていて、夏という時間（夏休み）が永遠に続いていつほしいと願っています。

〔四〕「うるさいくらいによく鳴いていた」ミンミン蟬の声を聞いて「きのう真夜中に泣いていた、赤ん坊の泣き声」を思い出した流星は「この世はあらゆる泣き声でいっぱいだ」と「哲学者のよう」なことばを口にします。「地球のあつちでもう泣いている」ということは、すなわち「泣くということが生きることなのだろう」ということ。流星は「泣く（鳴く）」という行為に生命のエネルギーを感じています（→4）。

〔五〕おじいさんに蟬を採つてもいながら、流星は「また、いつか、このおじいさんに蟬を採つてもらうことがあるだろうか」とこれから先のことについてをはせます。「おじいさんくらい、背がのびたら、もう、おじいさんにたよら

「流星は、元々こうして一、二年生だ。
三、四年生（三ヶ月の二ヶ月後）から月次のモニターリング（ここ流星）
なくともよくなるかもしれない」。そういう田舎やかてくるのだろうかと
しています。

問十

生きること（生命のエネルギー）や自分の未来をイメージした流星の一空想は先へ先へとのひで」いきます。「おじいさんはいつか、死んでしまうんだろう」「自分だって死が待っているんだろう」「（同じように見える）蟬だって、毎年、ちがう」。生まれてきたものはいつか必ず死を迎える。すべての生き物は生と死の繰り返しから成る「大きな河の流れのなか」について、自分もまた例外ではないのだと流星は考えて、います（→3）。

流星は自分を含めたすべてに刹那的な（短い時間で終わってしまう）印象を抱いたのでしょうか。そうすることで

問九・十 アパートにもどった流星は「女の子」に出会います。「いつもの制服」ではない彼女を流星は「かわいいな」と思いましたが、そもそも東の間。「一瞬見つからぬう」と、女の子は「かす出してしまいます。夏木みよ冬つ

「——」
問 十二・十三 「自分よ、（標本の）虫になれ」と念じるほど学校に行くことを嫌がつていた流星でしたが、ついに運命の「九月一日」が有無を言わさぬ強さをもつて訪れてしましました（問十二→2）。「わーっと泣きたがった」流星でしたが、「昨日は生きていた蟬があお向けになつて死んでいる」のを見た後、「あらゆるところに変化は訪れる」という「哲学」的なことばと「劇薬」の名前を口にすると、静かに眠りの中に引き込まれていきます。生命（時）を「今」という瞬間に閉じ込めてしまふ「劇薬」は、生と死の繰り返しから成る「大きな河の流れ」の前で抗うこともできず、立ち尽くしていった流星に安らぎを与えてくれるものだつたのかかもしれません（問十三→4）。

「たものの、筆者は『いまの日本に理想の国の姿を見ること』はできないと考えています。『人か幸せに生きていくためには、それほどたくさんモノは必要ない』。『ほどんどモノのない暮らしでも、家族の愛情と子どもたちの澄んだひとみ、みんなのくつたくのない笑顔』があふれてる海外の国へ問一・②を見れば、「欲望」を「起爆力」「推進力」として作り上げた日本が精神的に貧しい、不幸せな国であるへ問二・①」ことが浮き彫りにされると筆者は考えています。「欲」は「人を前進させる大きな力」へ問一・Aがある一方で、「人を呪縛し、人を狂わすこともある」へ問二・B」という二面性を持つています。

問三・四 今でこそ「欲」とうまく付き合っている筆者ですが、「若いときにはそれなりの欲があり」、欲が満たされなければ「その分、枯渴感を覚え」ることもあったようです。ところが、一切の「欲」を捨て去らなければならぬ「戦争」を体験したこと、筆者は「あまりに高い望みをもちすぎる」からこそ「不満が大きくなる」ことに気づきます。「欲」を抑えれば「足りない」という焦燥感や不満と縁遠くなり、「ゆとりや柔軟性が生まれてくる」
→問四。欲に目がくらんでいると、このような簡単な理屈にも気づかなくなってしまうのでしょうか(→問三)。

い
ます。
欲深い言動で失敗した例はたくさん挙がりそうですが、欲を抱いたことがプラスに働いた例はなかなか難しそうです。しかも、両者を結んで「欲」についての考えをまとめるとなると至難の業でしょう。大きなこと、劇的な展開をまとめようとせず、身近で起こったささいな出来事を中心に具体例を考え、「欲」というものについて肯定的にとらえているのか、否定的なイメージを持っているのかという、自分の見解について明らかにします。